

モンペリエ研修を振り返る

中山昭則

Akinori NAKAYAMA

1. はじめに

筆者は2011年3月4日から4月3日までの1ヶ月間、本学とモンペリエ第3大学との間で結ばれている「研究者交流協定」に基づく派遣教員として、フランス南西部の都市モンペリエ市に滞在する機会を得た。モンペリエ市は人口25万人の町であるが、その内およそ6万人がモンペリエ第1（医学、法学、経済学部）・第2（理工学部）・第3大学（文学、芸術学部）で学ぶ学生が占めている。この3大学で最も有名なのは1289年に時のローマ法王によって認可されていたという医学部である。大予言者ノストラダムスもここに在籍していたという記録が残っている（しかし、入学記録しか確認されていない）。歴史的には法学部が最も古く1160年にはその礎となる法学校があったと言われている。

筆者は地理学科にお世話になった。モンペリエに関する詳しい論考は『別府大学紀要第52号』を参照されたい。本稿では1ヶ月に及ぶ現地での暮らしと、筆者は大の鉄道好きなのでその点について触れてみたい。

2. モンペリエ第3大学にて行った講義

今回の滞在の目的は3回の講義をすることである。講義は3月25日（金）12:15~14:15、学部3年生を対象として「日本の最近の観光動向」、3月28日（月）14:30~16:30、一般公開という形で「日本の温泉地の動向（別府温泉中心）」、3月29日（火）16:30~18:30、大学院生を対象とした「伝統的な町並・農村を観光資源として再評価の動向」というスケジュールで行った。この日程は先方の都合で出発直前に変更されたもので、その結果モンペリエに到着して最初の講義まで3週間待つことになった。

さて、講義であるが1回目は最初ということでも多少緊張した。学生たちは日本人による日本の観光動向という珍しいテーマに興味津々の様子で聞き入ってくれた。講義の要点は「総合保養地域整備法（リゾート法）」による開発とその頓挫について事例を挙げ説明した。その後のグリーンツーリズムの発展、そして今日のご当地キャラやB級グルメという動きについて解説した。最後のご当地キャラについては大変驚

いていた様子である。学生からは東京から京都までの交通費や宿泊費について尋ねられ、その高さに驚いていた。

2回目の講義は一般公開という形で行われた。地理学科が予



写真① 学生たちと



写真② 講義の様子



写真③ キャンパス地理学科棟

め行政の観光部署担当者などに案内を出してくれていたのであった。別府温泉の発展過程を概説したが、日本の温泉利用に対して高い関心が寄せられた。温泉と神道との関係性や何故そんなに熱い湯に浸かるのかといった質問も飛び交った。

3回目の講義は、重要伝統的建造物群保存地区が観光資源として構築されることによって生じている問題を解説した。例えば、白川郷で起こっているプライバシー保護（観光公害）の問題などを説明した。院生からはオギュスタン・ベルク（フランスの地理学者）の著書を引き合いに出して、保護と開発の思想的な側面の質問も出てきた。幸い筆者もベルクの著書を読んでいたのかどうか回答出来たが…冷や汗ものだった。やはりレベルが高い。しかし、知的刺激を沢山吸収することが出来た。

今回最も驚いたのは、モンペリエ第3大学の教員の研究室は個室ではないということである。大抵2～4人部屋ということらしい。今回お世話になったサラレ先生も4人部屋だという。地理学科でお世話になったクロザ教授とバルトマン教授も部屋を共有しているが、何とデスクも共有ということであった。出校日を調整して鉢合わせにならないようにしているというが大変であろう。2年も前からもう一つデスクを買ってほしいと大学に申請しているらしい。基本的に研究は自宅ですて、講義の日だけ出校すればいいらしい。それはそれで羨ましい限りであるが…。

3. 日常生活

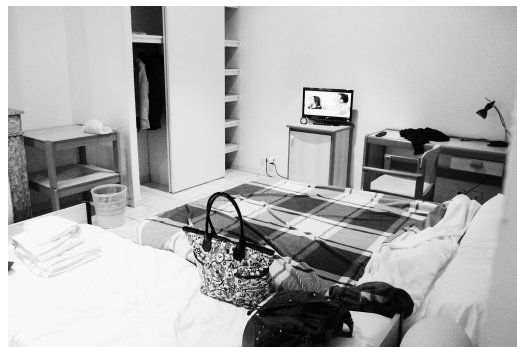
1ヶ月間お世話になる大学所有の来客・研修用宿舎(以下、スタジオ)は駅から歩いて7～8分町の中心部にある。

そのスタジオは集合住宅の中の6室と共同キッチンとサロンが備えられており、上の階に

は市民が住んでいるようである。だが、滞在期間中声は聞いたが姿を見ることは無かった。不思議な人々だ。スタジオの各部屋は満室の時は無かったが常時どこかの部屋に誰かが居たようである。しかし、一回だけ女性の住人と顔を合わせたのであった。これまた不思議な来訪者たちである。

スタジオの生活環境は申し分なかった。数分も歩けばフランス最大のチェーン網を誇るスーパー「モノプリ」とショッピングセンターがあり何でも揃う。極端な話“身一つ”で行っても何とかなる。また、スタジオから3分も歩くと、この町の中心地コメディ広場に出る。ここは何時も賑わっている。オペラハウス（今は新しい劇場で上演されている）があり、トラム（路面電車）も広場脇を走っている。これを利用して第3大学に向かうことになる。部屋は10畳程のワンルームにバスルームとトイレが付いている。掃除は週一回おばさんがやってきてシーツとバスタオルの交換と隅々まできれいにしてくれる。

こうしてスタジオで快適な暮らしが約束される筈であったが、その願いは初日の夜でくずれさった。夜入浴中突然シャワーのお湯が完全に水となる大惨事が起きた。一気に暗雲が垂れこめることになった。結局これは解決されず最後の日までお風呂は朝入ることにした。原因は夜になるとタンクのお湯が無くなるということで



写真④ スタジオ内の様子



写真⑤ スーパーモノプリの様子



写真⑥ コメディ広場



写真⑦ モンペリエ市のトラム

ある。タンクはスタジオ共有ということで早い話“早い者勝ち”なのだそう。ということで、次の日からは“朝風呂”で住人の中で最も早くお湯を使ってしまうことにした。

日常生活ではスーパー「モノブリ」に大変お世話になった。幸いレトルトのお米が売っていたのでそれを主食として、おかずは肉を焼いたりした。質素な料理ではあるがこのスタイルはとても気に入った。レトルトのお米はカレー味等もあり飽きることは無かった。

こちらの物価はやはり決して安くは無かったような気がする。ハムとか肉類とサラダは日本とほぼ同じ値段であったと思う。ビールはいつも500mlで1ユーロくらいのものを買っていた。アサヒスーパードライも売っていたが、350ml缶が2.5ユーロ位（280円）していた。これに対して、ミネラルウォーターはいつも1.5リットル0.19ユーロ（22円）の物を買っていた。また、フランスと言えば細長いフランスパンをイメージするが、全くその通りで、朝から晩までパン屋さんは賑わっていた。値段もだいたい1.0～2.0ユーロの物が多かった。チェーン店のPaulという店で買うことが多かったが、一回の買い物で5～6ユーロ（600円位）使ってしまうので、段々とスーパーの安いパンを買う頻度が高くなっていった。

一つ残念だったのはお天気が今一つであったことである。こればかりはどうにもならないが、3月11日（金）から16日（水）まで6日間

雨が続いたのは痛かった。随分と予定が狂ってしまった。

4. モンペリエの町

この町は周辺のニームやベジエと違いローマ遺跡の無い町である。このことに市民はかなりのコンプレックスもあると聞いたが、その代わり中世以降ワインの集積地として栄えた。ワインはこの周辺のラングドック地方が現在フランス最大の生産量を誇るという。この地のワインは19世紀後半以降“テーブルワイン”という安いワインを大々的に売り出してきた。この頃大消費地パリはちょうど産業革命を迎え、労働者階級の成立という廉価なワインの受け皿が形成された時期であった。こうした経緯から中世後期のモンペリエ市民は結構豊かな生活を営んでいたという。町にはその時に建てられた商館やワイン成金の館らしきものも多く残されている。

旧市街地は中世からの細い路地が入り組んでいる。古い建物の中には洒落たレストランやブティックとして再利用されている処も多い。旧市街を抜けるとルイ14世を称えた凱旋門とペルー公園が広がっている。このあたりが観光散策ルートとなっている。コメディ広場は1980年代以降整備されたもので、この頃までは幹線道路が走っていたという。車をすべて締め出し広場として整備し町に賑わいが戻ったといわれて



写真⑧ 旧市街



写真⑨ 凱旋門



写真⑩ 新市街

いる。フランスは1970年代末から国内各都市で都市再開発が行われ、その時に各地でトラムが復活している。ドイツ国境に近いストラスブールなどの事例は良く知られている。モンペリエもその流れに沿って再開発が進められたという。駅裏の旧軍用地跡に建設された新市街地は「アンティゴニーユ」と呼ばれ、スペイン人建築家リカルド・ボフィルの手によって造られた。ここには市役所や図書館、銀行、ホテルが集積し業務中心地区（C.D.E）を形成している。

5. 鉄道旅行～TGV は本当に速いのか??～

今回フランス国内移動は鉄道を利用した。フランスには世界に誇る高速列車 TGV があるが、今回も何度か乗車した。さて、このフランスが誇る列車の実力の程は如何なものなのだろうか?? 興味があるので東海道山陽新幹線の「のぞみ」と比較してみた。パリ・モンペリエ間約770kmに匹敵する区間として東京・福山間791kmと比較してみよう。福山に停車する「のぞみ」の東京からの所要時間は3時間45分程度であり、TGV の所要時間はちょうど4時間である。よって新幹線の勝ちとなる。TGV はほぼ時刻表通りの運行がなされているが、初日に乗車したパリ・シャルル・ド・ゴールからモンペリエに向かう TGV は30分程度遅れた。日本人が一番気にする5～15分程度の遅れは日常にあると聞いた。

遅れの理由は色々と考えられる。一つにはヨーロッパの駅の構造に問題があると思う。プラットホームは日本のように列車の乗降口と同じ高さではない所が多い。よって、乗り降りの際大きな荷物を「よいしょ」と持ち上げなければならない。もう一つは、TGV は在来線と専用線両方で走行していることも挙げられよう。つまり在来線に遅れが生じると TGV にも影響が及ぶのではないか。

その一方、フランス国鉄は早割割引制度が充実している。今回乗車したパリ・シャルル・ド・ゴールからモンペリエに向かう TGV の料金は一等車に乗って1人72ユーロ（8,500円程度）であった。「のぞみ」は先ほどの東京・福山間グリーン車を利用すると23,000円かかる。TGV にこんなに安く乗車できたのは3ヶ月前に購入したからだ。この割引制度を利用すると、モンペリエ・ニース間360kmをマルセイユで乗り換え TGV を二つ利用（2等車）しても76ユーロ（9,000円）であったし、帰りは直通の在来線特急の1等車に乗って37ユーロ（4,300円）であった。バルセロナへも TGV と在来線特急合わせても2等車でも47ユーロ（5,500円）で行けた。

もう一点鉄道料金のことを感じたのは、TGV がとても手軽に乗れるということである。例えば、カルカソンヌに行った時であるが、帰途カルカソンヌ駅で TGV 当日券2等二人計51.0ユーロ（6,000円）であったのに対し、ローカル鈍行列車も47.0ユーロ（5,500円）もした。当然 TGV に乗車した。

6. おわりに

モンペリエ滞在から早くも1年が過ぎてしまった。今思えばあの1ヶ月間は夢のような時間であった。先ずはこの機会を与えて頂いた別府大学に感謝しなければならない。1ヶ月はあっという間に過ぎてしまった。

モンペリエ市はフランス国内でも「住んでみたい都市」として人気の高い町であるらしい。若者が多く大学関係者も多く居住しているため安心して過ごせる街といえよう。誰もが知る大観光地であるわけでもないが、中世に由来を持つ旧市街の佇まいはタイムスリップしたかのような錯覚を感じてしまう。これに対して斬新なデザインの建造物で固められた新市街地とのコントラストが絶妙である。

語り尽くせない1ヶ月間の収穫を国際経営学部の更なる発展のために還元しなければならない。本稿を執筆しながらその思いを一層強くした。

最後に、現地ではモンペリエ第3大学のサラレ先生には研修期間中大変お世話になった。地理学科のクロザ教授とバルトマン教授からは現地の案内と講義のコーディネートをして頂いた。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

注) レート換算は滞在期間当時の1ユーロ118円で計算